

戦後延吉での生活

——終戦から引揚げまで——

執筆：猪伏昌三

編集：佐藤量

1929年3月10日、小生は猪伏家の三男として朝鮮半島の元山で生まれた。祖父の代から元山駅前で造り酒屋を営んでおり、「南海」と「長徳」の銘酒を醸造し、蜂印のポートワインも製造した。杜氏は新潟県から雇い、米は現地で調達し、酒樽には日本から取り寄せた吉野杉を使っていた。

満洲事変以降、事業拡大のために満洲の凶們に居を構え、1935年4月に凶們小学校に入学した。しかし、1938年に酒造工場が火事に見舞われたことから、父親は満鉄関連の運送業社に転職し、一家で延吉に転居した。その後延吉小学校に転校し、1942年に延吉中学校（のちに間島中学校）の1期生として進学した。終戦をむかえたのは4年生のことである。

敗戦直後の延吉

1945年8月15日正午、陛下の終戦の放送が流れると直後の延吉市内の空気は一変した。日本人が単独で行動すること

は危険になった。翌日の午後、「日本人は全員604部隊に避難せよ」との緊急の連絡が隣組からあり、戸締まりもほどほどに、身の回りの物を持てるだけ持って部隊の広場に集まった。病人、老人、赤子、それに、周辺地に入植していた開拓団の人たちもいた。何十キロも離れた所から飲まず食わずで避難して来たのであろう。みな生気がなく、目もうつろで、何かに怯えながら戦々恐々としている様子だった。

3日後に帰宅したが、住宅を追い出されて、少々の家財を売ったお金だけでは家族8人の生活は不可能であり、何かをしなければ食べていけなかった。その頃、日本軍の捕虜が東満の各地から連日貨車で延吉駅へ運び込まれては、そのあと徒歩で隊伍を組み、そのまま延吉捕虜収容所へ連行されていった。何日もかかって38度線以北の朝鮮半島から連行されてきた兵隊もいた。地域も色々であったと思うが、みな疲弊し、どうにか歩いているような兵隊もいた。戦争末期で高齢の臨時招

集兵が多く、若い者は既に南方戦線へ飛ばされており、元気な者は少ないように見受けられた。

小生はまだ若くて小柄で小回りが利き、また同じ日本人同士ということで意が通ずるので、ソ連兵の目を掠めては隊伍の中へ入り込み、牛革のバンド、純毛の靴下、飯盒、雑嚢、軍靴など、何でも片っ端から買わせてもらった。護送が始まる前に倉庫から新品の服装で身の回りを固め、所持品もそれなりに持ち出した抜け目のない捕虜もあり、「僕、早く高く買ってくれんかい」と催促されたりもした。捕虜の輸送は連日続いた。シベリヤに送られた捕虜はこの延吉ルートがかなりの数にのぼったと思う。

そういう間にも、寒さは日一日と加わり、10月になると零度以下の日もあった。そんな中、それまでの住居を追われた在住者も、敗戦と共に避難してきた者たちも、タバコ巻きを始めたり、おにぎりや赤飯などを作って売ったり、とにかく生きていくため、飢えをしのぐためなら何でもやるという切羽詰まった状況であった。小さい子供から年配者までが行商のために街中へ出た。

燃料確保と高粱飯

越冬のためには燃料確保が必要だった。例年は石炭を馬車で買ってきて冬の準備をしたものだが、転居先にはオンドルもペーチカもストーブもなく、かといって火鉢や炬燵では大陸の冬を乗り越える暖

は取れなかった。そこで目を付けたのが、夏場、ソ連の戦車部隊が数週間駐屯していたフルハト河の南側河川敷に繁茂する背の高い雑草だった。それは燃料として実に手頃だった。

小生は弟と二人で1日に2、3回、ドンゴロス<编者注:麻袋のこと>を携え、できるだけ背丈が長く太いのを刈り取り、パンパンに詰め込んでは荒縄で背負って帰った。西からの空っ風が強い時などは、南北に架かる延吉橋の上で、重くて大きなドンゴロスが押されて左から右へよろけたが、根性で踏ん張った。それでも前庭に積み上げていく雑草の嵩が毎日増えるのが楽しみで、それがかなりの高さになった時、「やれやれひと安心」と胸をなでおろしたものである。

米の飯は敗戦と共にほとんど口にすることはなくなり、代わって高粱飯が主食になった。これは普通に炊くと硬くて消化に悪いので、飯盒でお粥に近い柔らかさまで炊かねばならなかったが、コツが要った。まず水に一晩浸けておき、朝に一度炊く。これには枯れ草が役立ち、すぐに沸騰した。それを杵のようなもので搗き、赤い渋皮が分離したら、一度水洗いして渋味を取り、そのあと大豆油を少量と塩を入れて炊き直す。すると、見事に美味しい高粱のご飯ができあがるのだ。引揚げまでの毎日、この高粱飯で命を永らえることができたが、引揚げの際にも、「日本では食料がない」と言われ、重いのに一斗近く持って帰ることになった。

満蒙開拓青少年義勇軍の少年を預かる

ところで、10月から始めた行商で延吉刑務所へよく行ったが、そこには満蒙開拓青少年義勇軍の隊員が駐屯していた。彼らは食糧増産のため、また国家の銃後を守るため、満洲に新天地を求めて全国から志願し、故郷を離れてきた16～19歳の意気軒昂な青少年であった。しかし突如としてソ連の進攻が始まり、指揮系統は乱れ、ただ日本への帰国をめざして避難してきたのである。昼夜を分かたず歩き続ける中で、近隣の開拓団に配属されていた隊も加わって人数は膨れ上がり、全く情報の分からない者同士が無い知恵を絞り、「邦人も多く、帰国するにも最短距離」ということで延吉市を目指し、300～400キロもの道なき道を南下したのであった。

そうしてやっと目的の延吉市に辿り着いたのだが、そこは希望を持てるような町ではなく、惨めな日本人の溜まり場でしかなかった。居留民に力を貸してもらって何とか居場所を確保し、学校の教室や工場の片隅にも分散したが、大半は延吉刑務所の作業場に起居するようになった。

やがて、そうした窮状を見兼ねて居留民の世話役が、隊員たちを邦人の家庭に預かるよう手配した。受け入れられる家族はそう多くはなかったが、同胞として1人でも多くを助けてあげようと皆が協力した。我が家にも2人が来た。1人は石川県出身の吠木英世君といい、もう1人は

長野県出身で鈴木と名乗った。見るからに哀れな姿で、母も最初、どうすべきか躊躇していた。とりあえず着ている物を全部脱がせ、乏しい中から着替えを与え、洗濯から始めた。食うや食わずの中で扶養家族が2人増えたので、正直大変だった。12月に入って寒さは一段と増してきた。室内の汲み置き飲み水も零度以下になり、凍結すると甕では割れるため樽に保管していたが、朝には酌が凍りついて、すくえない日が何日もあった。寝る時は昼間の服の上に外套を着て、防寒帽をかぶり、靴下も二枚重ねの間にトウガラシを入れて履き、毛布をかぶった。底冷えがひどい寒波の際には亡くなる人が特に多く、中でも5歳以下の子供は見かけなくなるぐらい、次から次へと亡くなっていった。

父の死

12月下旬、さらに強烈な寒波に見舞われた。大陸の雪は湿り気が少なく、横殴りに降っては舞い上がり、様々な波形や稜線を描きつつ積もっていく。底まで凍結した川には牛車が乗り入れて天然氷の製造が始まり、夏のかき氷の原料として、その切り出しが盛んに行なわれていた。

そんな中、小生も連日熱にうなされていたが、ある日、夜もかなり深まった頃、隣に寝ていた父が急に声をかけた。「おい昌三、もう駄目かも知らん。情けない。猪伏家を継ぐのはお前しかおらん。ここまで来て戦争に負けて、敗者の姿で日本に帰るなんて堪えられるものではない。も

うじき石灰石の山の採掘権の許可が下りる段になって、こうなるとは余りにも残念だ、昌三、わしの無念を晴らしてくれんか」。こちらも聞き逃すまいと必死だった。母も枕元で聴いていたが、妹らは高熱で寝たままなので、この父の最期の言葉を聴くことはできなかった。その夜は氷点下 30 度を越すこの冬一番の冷え込みで、延吉全体でも亡くなった人が突出して多かったそうである。寒冷前線が延吉の夜空をまるで通り魔の如く駆け抜けたように思われた。

豆腐売り

父亡きあと、どうやって生き抜くか、一世一代の戦いが始まった。中国人街の北の方に、ロバに臼を引かせて造る豆腐製造所があったが、まずはそれを仕入れて売ることにした。現金収入のある手取り早い商売だ。さっそく、軍隊の乾パンを保存するブリキの細長い空き缶を手に入れ、外側を断熱のために板で囲い、蓋を付け、それを担いで夜明け前の暗い道を製造所へ向かった。

30 丁ほど受け取ってお金を払い、外に出ると、さすがに寒さを感じた。肩に担いだケースから湯気が立ちのぼる。歩くとケースの中の豆腐が湯と共に揺れるため、腰をふらつかせながらバランスをとる。

「豆花」と大きい声で売り歩くと 1 軒の戸が開いて「小輩 来来」と声をかけてくれた時は、泣きたいほど嬉しかった。

鉄工所と風呂屋

そうこうしているうちに「鉄工所で働いてはどうか」との紹介があった。経営者は金という朝鮮の人で、日本の工業学校を出たエンジニアだった。ソ連軍の自動車の修理から旋盤、溶接、鍛冶など、鉄工万般に亘る幅広い仕事をしており、さっそく勤めることになった。いきなり大ハンマーで真っ赤に焼いた鉄を叩く作業を始めたが、へっぴり腰の動作が危なっかしく、「この仕事はお前には向かん」と言われて溶接に回された。剣道で鍛えた腕っぷしには自信があったが、竹刀と鉄の塊とではまるきり感触が違っていたし、第一、飯も腹一杯食べていないのに力が出る訳もなかった。

回されたのは電気溶接機を製作する部署だった。どこから外してきたのか、電柱の上に取り付けてあった変圧器をそこで解体し、中のコイルを取り出し、絶縁した太く平たい銅線の上に巻きつけたりして完成させていた。頭の良い人もいるものだと感心した。溶接そのものも一から教えてもらった。ガスと電気の二つがあり、電気溶接は、溶接棒をプラスのはさみでつまみ、二枚の金属の隙間に近付けて火花を発生させながら溶かしていくと、綺麗に接着している。便利な道具があるものだと、これにも感心した。

そのうち、ソ連軍のトラックの荷台に亀裂ができたとかで、大きな修理の仕事が入ったことがあった。こちらは未熟なので、その作業にはなかなか加えてもら

えなかったが、一度やらせてもらった時、「そんな鼻くそみたいなやり方では鉄どうし接着しないのだ」と叱られたのを思い出す。

そうして溶接と共に、雑用や掃除、使い走りなどに追い回されている時、金社長から「うちが経営している風呂屋の仕事をやってくれないか」と話を持ちかけられ、さっそく手伝いをするようになった。風呂屋は朝鮮市場の入り口の前にあって場所が良く、客も多かった。日本人もちよいちよい来ていたと思うが、裏方の仕事なので、知り合いの日本人にはほとんど会うことはなかった。

湯は、それまで石炭で沸かしていた釜は使わずに、ニクロム線をコイル状に巻いて電熱機を製作し、それをボイラータンクに入れてスイッチを入れれば簡単に沸いてくれた。温度計で湯温を測り、水が減ればヒューガルポンプ<編者注：井戸水を吸い上げるモーターポンプ>を回して水を補給し、客が増えて湯が減ればその分だけ給湯し、常に正常な湯量と湯温を維持すればよかった。合理的な発想と仕組みに驚いた。その上、小生は四畳半のオンドル部屋に泊まり込み。いい仕事に巡り合えたと感謝した。

ブリキ屋

気候がさらに暖かくなった頃、風呂屋の向かいの中国人が経営するブリキ屋に転職することになった。主人は日本語が上手だった。仕事は独特の手作業で、やか

んや洗面器などブリキ製品全般を製作し、穴の開いたアルミ鍋などの修理も手がけた。小生の仕事は、亜鉛メッキを施した屋根用の波トタンを延ばし、それが何枚もたまると、今度は原寸の型紙に沿って線を引き、ハサミで切っていくというものであった。

昼にはお金をもらって向かいの冷麺屋へ昼食を食べに行くのが常だったが、その冷麺の旨さは絶品であった。目の前の大釜では牛の頭をゆで、隣の釜では、沸騰している湯の中へ、練って筒に入れたでんぷんを長い梃子でトコロテンを突き出すように落とし込む。さっとゆがいて氷で冷やし、キムチなどいろいろな具を放り込んでいた。特に雉の肉の旨さは格別で、今も思い出すとたまらない。もう一度食べたい思いに駆られるが、今は雉の肉は使われてないのが残念だ。

それはともかく、ブリキバサミを朝から夕方まで使っていると、握力が鈍ってくる。「ハサミと頭は使いよう」といい、これにもコツの会得が必要であったが、小生は慣れないため、薬指と中指に力がかかって水ぶくれの豆ができ、それが破れて仕事ができなくなってしまった。「早く治して主人に負担をかけないようにしよう」と焦っていたところ、幸い近所に元軍医だという日本人の除隊者がいて、治療を受けることができた。化膿しかけた傷口を消毒し、リバノールという黄色い消毒ガーゼをあてがい、包帯をしてもらって何とか仕事に戻ることができた。ち

なみに、この傷は 1946 年 8 月 16 日に引揚げるまで治らず、首から紐で右手を吊った姿で日本へ帰ることとなった。

引揚げ

1946 年 6 月あたりから、アメリカの仲裁で日本人の引揚げ問題が持ち上がり、話は進展していったようだ。7 月になると、巷では「内地に帰れるのではないか」との観測が流れはじめ、「長かった夢が叶えられる」「よくぞ今まで生きてきたものだ」と安堵に胸をなで下ろす人たちが増えてきた。病人を抱えて毎日が悪戦苦闘の人たちや、「お金もないのに内地へ帰ってどうするのだ」と不安にかられる人たちもいたが、それでも異国でのこの苦しみから間もなく逃れられるという希望に、誰もが日々胸を膨らませていった。

いよいよ引揚げがはじまるとのニュースが現実味を帯びはじめ、皆の気持ちは「日本に帰れる！」と希望で明るさを増していった。そんな頃、鉄工所や風呂屋で働いていた時の金社長から「いよいよ日本に帰れるようになるよ。はっきり日程が決まったら送別の宴を用意するので連絡するように」との伝言があった。そして 7 月の末、「出発は 8 月 16 日」との報が入り、小生の送別会が開かれることになった。

公園橋を渡ってしばらく行くと左側に大きい池があった。北側の斜面には 604 部隊の兵舎があり、もう少し先には日本人墓地がある。そこまでは行かなかった

が、池を越えてしばらく歩き、左に曲がった所にある一戸建ての閑静な屋敷が金社長の邸宅であり、この日の宴会場であった。そこで数人の人たちと一緒にご馳走にあずかったのだ。猫足の会席膳が 1 人ずつに用意され、サバリ<編者注:真鍮製の大きいお椀>や皿など初めて見る高価な食器類に、冷麺、なかじょく、漬物、酔の物など朝鮮料理の最高級メニューが盛られた。味噌汁にはトウガラシの真っ赤な粉が浮いていたので、息をかけて向こう側へ寄せ、その間に急いで啜ると口の中が火事のようになった。その時ほどコップの水の旨さを感じたことはなかった。

出発の指示が居留民団からあり、引揚げの機運は一気に盛り上がった。持帰る荷物は、先祖の位牌 43 枚に過去帖、寺田校長手書きの卒業証書に学籍簿、炊飯道具に着替え、それに金社長に言われた高粱やブリキ屋の奥さんから頂いたポーミーパン<編者注:トウモロコシのパン>などなど。そうした持てる物一切を風呂敷に包み、鞆やリュックにも入れて、皆で振り分けた。そして近所の人たちに送られ、当日正午、延吉駅前の広場に集まった。

集合した人は千人を超えていたように記憶している。小生ら第一陣は 40 数両の無蓋貨車へグループごとに乗り込んだ。列車はまず吉林市を目指して西へ走った。しかし、数駅通過すると長時間停車するといった具合で、随分と時間がかかった。翌朝 8 時頃、私たちは徒歩で吉林市に向けて歩き始めた。隊列を組み、八路軍の兵

士が5、6人付き添った。やがて山岳地帯の登山道に差し掛かると、「停止」の命令が出された。そこは八路軍の支配地域と国民政府軍の支配地域の境界で、鉄条網の手前に八路軍、向こう側に国府軍の監視兵が数人ずつ立ち会い、引揚げ者を1人ずつ引き渡す作業が行なわれた。

そこから更に登り坂を辿り、小姑家駅を経て老爺嶺駅に着いたのは午後3時頃だった。拉法駅から20キロほどの道のりだった。駅に近づいた時、国府軍兵士が拡声器を使い、「日本人引揚げ者の皆さん、お疲れ様でした。ここが老爺嶺駅です。ここから列車が出ますので、指示に従ってご乗車下さい」と流暢な日本語で呼びかけてくれたのが印象に残っている。

吉林市内では野宿で2泊。そこで3度無蓋貨車に乗り込み、一路、遙か南西に位置する錦州を目指した。途中、「満洲国」の首都だった新京を通過。見渡す限りの南満洲平原を走り抜けて四平へ。さらに南へ下って満州事変発端の地・奉天で1泊し、大陸最後の逗留地となる錦州に到着。20日程の乗船待ちとなった。葫蘆島は錦州からさらに南へ64キロもあり、この間は四度無蓋貨車に揺られた。港には日本の客船・貨物船やアメリカのリバティ号などいろいろな船が待ち受けてくれていた。船は渤海湾、黄海を抜け、3日目

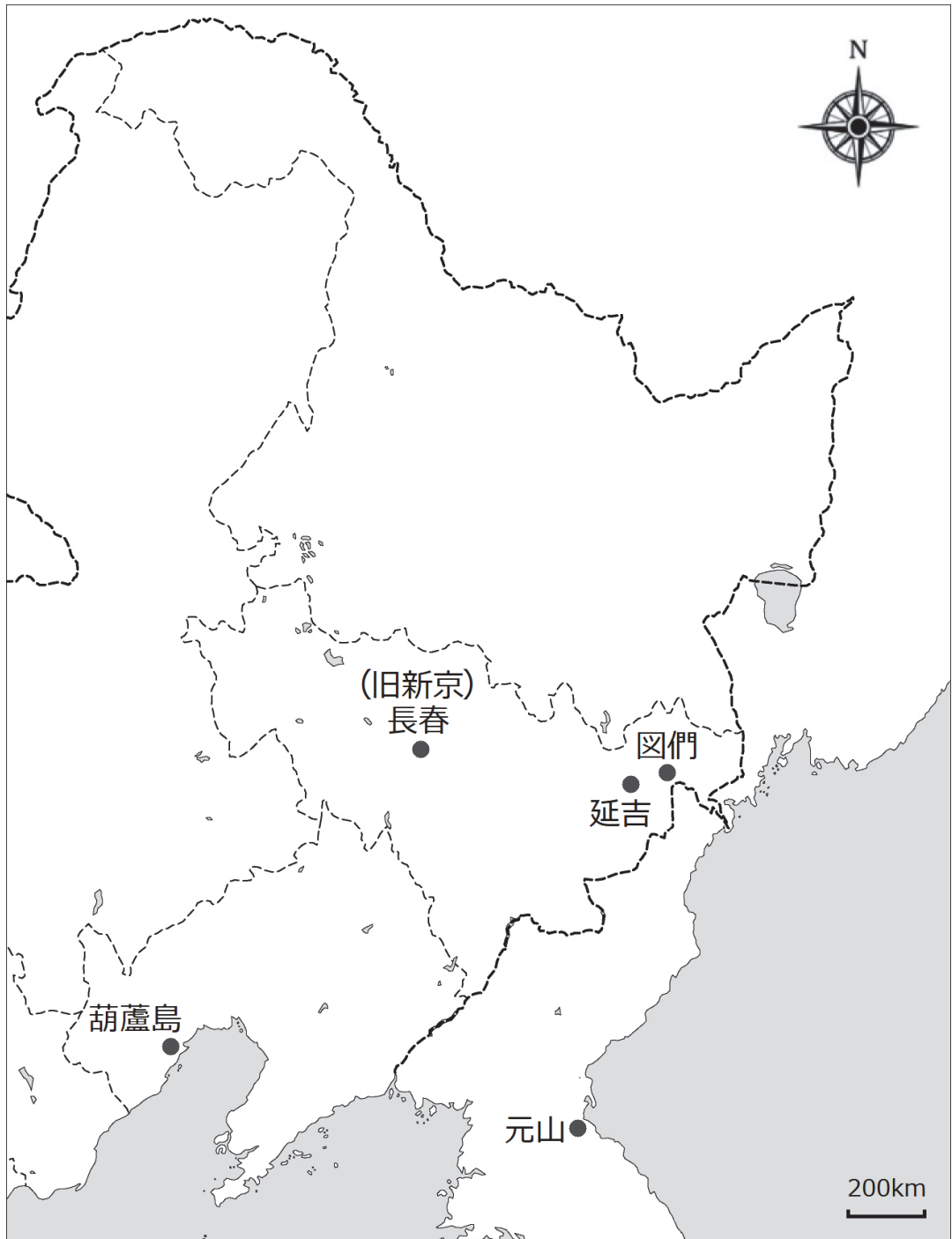
には対馬海峡から玄界灘に入った。10月10日博多港にて上陸、故国日本の大地を踏みしめた。

まとめにかえて

あれからほぼ70年。延吉市は中国吉林省延辺朝鮮族自治州の州都として、いわゆる「改革開放」の波に乗り、当時10万人ほどだった人口が、今や50万を超える大都市となった。そして、「満洲国」時代に建てられた建造物のほとんどは、壊されるか都市型に改築されて、街並みに昔日の面影は見られず、あの捕虜収容所の墓地も、私の父の遺体を埋めた日本人墓地もすべては跡形もなく、地下で永遠の眠りにについているかのようだ。

思えば、彼の地で望郷の思いに駆られつつ亡くなった夥しい同胞の遺骨は、引揚げ後はただの一体も持ち帰ることはできなかったが、その地がすさまじい勢いで変化していく様子を今、彼らはどのように見ていることだろう。

最後に、日本、朝鮮半島、中国、それぞれの国の民衆がかつて流した痛恨・悲惨の涙を再び見ないことを願いつつ、3つの地域にまたがって少年期を過ごした数奇な縁を懸け橋に、残る人生を東アジアの恒久平和のために注いで参りたいと念じております。



中国東北部の地図 (作成者：大野絢也)